

三井共同建設コンサルタント

数納 慎悟

(株)熊谷組

前渢 卓郎

埼玉大学 工学部

小田 匡寛

## 1.はじめに

岩盤の力学的性質は、節理・断層などの不連続面（クラックと呼ぶ）の存在、地下水、初期応力などによる影響によって大きく左右される。特に天然のクラックの存在は、その幾何学的性質において極めて複雑であるため、岩盤の力学的挙動にどのような影響を及ぼすかを一般性を失わないように評価することは至難なこととされている。以前の石膏モデル供試体を用いた一連の実験的研究から、クラックの幾何学的性質を統一的かつ定量的に表現したクラックテンソルが不連続性材料の力学的性質を評価する上で有効であることが確かめられてきた。本研究は、これらの結果が実際にクラックを含む岩石においても成立することを検証するため、長野県下伊那郡の大西山崩壊現場で採取したミロナイトの一軸圧縮試験を行い、その力学的性質を調べたものである。

## 2.供試体

本実験で用いた供試体（全部で9本）は直方体であり、図1～9はそれらの展開図を示している。各々の面でのクラックのスケッチに関しては、探傷剤を利用して、より客観的にクラックを観察している。クラックテンソル  $F_{ij}$  は、図10に示されている様な右手系の基底ベクトルに関して

これらの展開図を利用して決定した。表1はすべての岩石供試体の  $F_{ij}$  とそれより得られる諸量を示している。

ただし、 $F_0$  と  $R$  は(1), (2)式で与えられ、それぞれ平均的な密度と、異方性の程度を表す指標となる。

表. 1

	$F_x$	$F_y$	$F_z$	$F_x^2$	$X_1$	$X_2$	$X_3$	$F_0$	$R$
	$F_{xy}$	$F_{yz}$	$F_{zx}$	$Sym.$					
ROCK-1	3.87	0.94	-0.74	4.71	31.1°, 31.4°, 31.7°	9.23	0.47		
	3.20	-0.31	0.89	4.71	31.1°, 31.4°, 31.7°	9.23	0.47		
	$S_{sym}$	0.73		4.71	31.1°, 31.4°, 31.7°	9.23	0.47		
2	3.44	0.34	1.16	3.34	31.1°, 31.4°, 31.7°	12.89	0.51		
	2.29	0.48	0.89	3.35	30.4°, 30.6°, 30.8°	12.89	0.51		
	$S_{sym}$	0.76		3.29	30.1°, 30.3°, 30.5°	12.89	0.51		
3	1.16	0.41	-0.18	2.54	31.1°, 31.4°, 31.7°	3.99	0.45		
	2.37	-0.10	1.03	2.35	31.1°, 31.4°, 31.7°	3.99	0.45		
	$S_{sym}$	0.32		2.35	31.1°, 31.4°, 31.7°	3.99	0.45		
4	7.23	1.71	-1.09	8.46	31.0°, 44.5°, 89.9°				
	4.10	-0.34	4.57	4.10	31.0°, 44.5°, 89.9°	16.40	0.40		
	$S_{sym}$	4.73		3.37	41.9°, 104.2°, 104.3°	16.40	0.40		
5	1.14	-0.11	-0.33	3.17	30.7°, 101.1°, 92.1°				
	3.35	0.93	2.15	3.29	30.3°, 81.2°, 101.3°	7.89	0.23		
	$S_{sym}$	2.04		2.42	31.9°, 81.9°, 81.9°	7.89	0.23		
6	0.36	-0.33	0.16	1.08	31.6°, 62.2°, 76.7°				
	1.50	-0.47	0.21	0.21	32.0°, 104.4°, 104.5°	2.18	1.13		
	$S_{sym}$	0.30		0.21	31.7°, 62.3°, 88.3°	2.18	1.13		
7	1.03	-0.04	-0.34	2.13	31.7°, 94.5°, 101.7°				
	1.06	0.29	1.03	1.03	31.7°, 94.5°, 101.7°	5.52	0.35		
	$S_{sym}$	2.39		1.03	31.7°, 94.5°, 101.7°	5.52	0.35		
8	0.07	-0.03	-0.09	0.14	31.8°, 104.4°, 104.5°				
	0.02	-0.02	0.03	0.03	34.0°, 96.1°, 102.3°	0.18	0.90		
	$S_{sym}$	0.09		0.01	31.5°, 104.5°, 104.5°	0.18	0.90		
9	0.85	-0.18	-0.07	0.91	31.2°, 104.7°, 96.8°				
	0.14	0.05	0.29	0.05	29.0°, 24.7°, 34.7°	1.38	0.11		
	$S_{sym}$	0.17		0.18	32.5°, 104.7°, 96.8°	1.38	0.11		

$$F_0 = F_{11} + F_{22} + F_{33} = \text{tr } F_{ij} \quad \dots \dots (1)$$

$$R = \sqrt{3} (F_{ij} F_{ij} - F_0^2 / 3)^{1/2} / F_0 \quad \dots \dots (2)$$

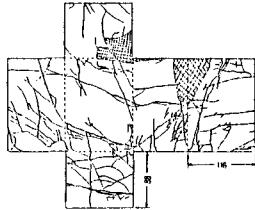


図. 1



図. 2

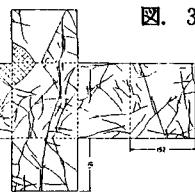
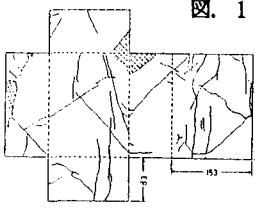


図. 3

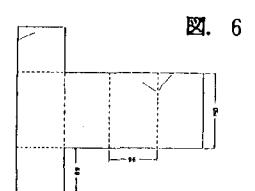
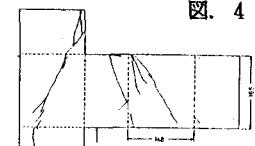


図. 5

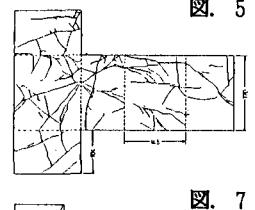


図. 7

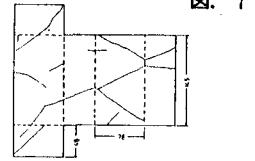


図. 8

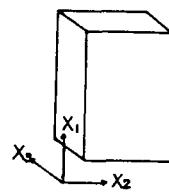


図. 9

### 3. 実験結果

供試体の4つの側面には約20枚の歪ゲージを貼り付け、局所的なひずみを計測している。図11に示された応力-ひずみ曲線は、ROCK-2(図2)より得られた一部のもの(各々の番号に対応)である。これにより、クラックを含む岩石の場合、局所的にはまったく異なる変形を生じており、クラックに大きく依存していることがわかる。特にクラックを横切るひずみゲージの応力-ひずみ曲線(①-④)をみると2 MPa以下の応力レベルで下に凸の曲線となっているのに対し、基質部(⑤, ⑥)のものは直線的に伸びていることが認められている。

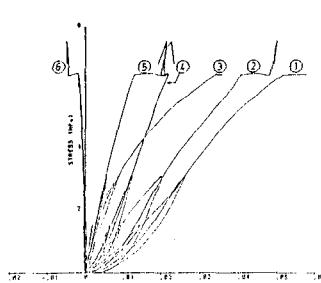


図. 11  
応力-歪  
曲線

図12は、クラックをほとんど含まないROCK-8の一軸圧縮強度 $\frac{q_u}{q_u^0}$ (=101.5 MPa)で無次元化した強度比( $\frac{q_u}{q_u^0}$ )と $F_o$ との関係をしたものである。また図中の直線の傾きは、石膏の実験より得られたものと同じである。実験結果にはかなりのバラツキがみられるが、石膏の結果とあまり矛盾していないことがわかる。データがばらつく原因としては、(1)実際の岩石供試体は異方性を呈していること(2)供試体の寸法が小さいため供試体全体を貫く一本のクラックによって強度が決定する、という点があげられる。

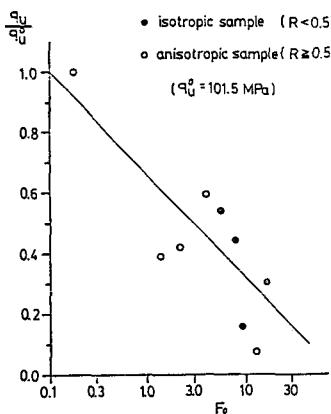


図. 12  
岩石供試体の  
一軸圧縮強度  
に対する $F_o$   
の効果

図13は、基質部のもので無次元化した1/2強度の割線変形係数( $E'/E$ )を、 $F_{ij}$ の成分 $F_{11}$ に対してプロットしたものである。 $E$ と $E'$ は4つの側面で計測された平均値であり、 $E$ に関しては約 $5 \times 10$  MPaであった。また、図中の曲線はクラックをPenny-shapeと仮定して理論的に導かれたもので、クラック相互の弾性干渉を無視した弾性解である。実験結果は等方性異方性を問わず理論曲線と定性的傾向が一致していることがわかる。すなわち、これらの岩石に含まれているクラックは、圧縮性の高いクロライトを主体とする粘土鉱物が結っているため、オープンクラック的挙動をしているものと考えられる。

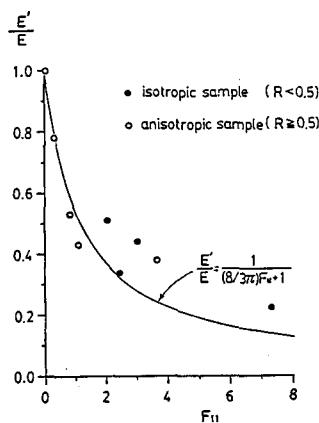


図. 13  
岩石供試体の  
割線変形係数  
に対する $F_{11}$   
の効果

### 4. おわりに

亀裂性岩石の力学的特性、特に変形特性に関してはクラックテンソルを用いることによって、より定量的な評価を与えることができるものと期待される。また異方性材料の強度特性をどのようにとらえるかは、今後の研究課題として残っている。

### 参考文献

- 1) 小田、鈴木、前渕(1984)不連続性材料の弾性コンプレイアンス、第16回岩盤力学に関するシンポジウム、pp 6-10
- 2) Oda,M(1984)"Similarity Rule of Crack Geometry in Statistically Homogeneous Rock Masses", Mechanics of Materials, vol.14, pp.119-129
- 3) 前渕、小田、数納、(1985)「クラックテンソルを用いた異方不連続性材料の破壊基準」、第17回岩盤力学に関するシンポジウム、pp26-29